

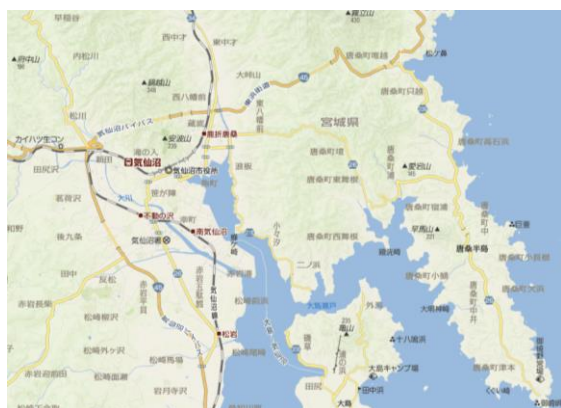
気仙沼漁港の「みなと文化」

川島 秀一

目 次

第1章 気仙沼港の整備と利用の沿革	
～「風待ち港」のたどった道～	11-1
1. 埋め立てないことで造った港	11-1
2. 近世の気仙沼港	11-2
3. 廻船から大型漁船へー明治・大正時代の気仙沼港ー	11-3
4. 昭和初期の気仙沼港	11-5
5. 戦後の気仙沼港	11-6
第2章 「みなと文化」の要素別概要	11-7
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」	11-7
(1) 信仰	11-7
(2) 節句・行事	11-9
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	11-10
(1) 物資の流通を担う産業	11-10
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	11-11
(1) 港湾利用産業	11-11
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	11-11
(1) 遊里＝料亭文化	11-11
(2) 芸術・文芸	11-11
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	11-12
(1) 港町の景色（みなとの文化的景観）	11-12
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き	11-14

所在地：宮城県気仙沼市	港の種類：漁港	港格：特定第三種漁港
-------------	---------	------------



【位置図】



【現況写真】

(特定第三種漁港市長協議会事務局 HP)

第1章 気仙沼港の整備と利用の沿革

～「風待ち港」のたどった道～

1. 埋め立てないことで造った港

気仙沼港の特色は、風土的には、小高い山を背負い、それがすぐに海に面した、典型的なリアス式海岸の地形に生まれていることである。また、歴史的には、塩竈や石巻と相違して、仙台藩のお膝元の港ではなかったことである。

気仙沼港は、昭和31年(1956)に魚市場が現在の内ノ脇に、当時「東洋一の魚市場」として移転したことによって大きく拡大した。リアス式海岸の奥深い湾である「気仙沼湾」に対して、それまで魚市場が建っていた港をさらに「内湾」と呼び始めたのも、このころからと思われる。港の中心的機能を譲り渡したころから生じてきた言葉である。その「内湾」が、近世から昭和の時代まで気仙沼港の中心だった。

近世の初期まで「細浦」と呼ばれていた気仙沼湾の奥は、近世の早い時期から埋め立てられることによって町を形成してきた。寛永19年(1642)の検地帳に、すでに「三日町」と「八日町」の地名が見られる。おそらく、正保から慶安(1644～52)にかけて、現在の「内湾」が成立したと思われるが、三日町から八日町へと埋め立てながら町を伸ばしてきた果てに、故意に「埋め立てない」ということで人工的に造られた。つまり、「内湾」は歴史的遺産であり、最初からリアス式海岸を利用した「自然の良港」ではなかったのである。

この「内湾」のような地形のことをカマと呼んだらしいことは、昭和時代まで「内湾」の北側の町を「釜ノ前」(現在の魚町)、西側の町を「西風釜(ならいがま)」(現在の南町)と呼んでいたことから考えられる。初めから、船を繫留させるために造った深い港に、砂浜を要する「塩釜」があったとは思われないからである。

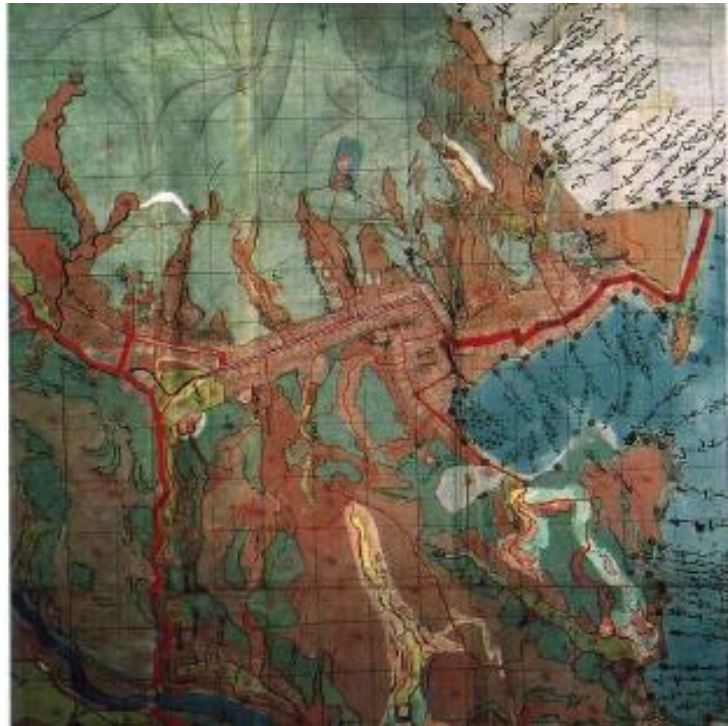
特に、気仙沼の港に臨む町の名として「西風釜」という地名は重要である。気仙沼地方では、どの漁師に聞いてもナライは西北風、西風は単にニシと呼んでいる。五月の青葉のまばゆい季節に、それらを翻すようにして吹く強い西北風のことを「青葉ナライ」とも呼

ぶが、その繊細な言葉は、気仙沼湾内で働く漁師にとって恐れられている風の名でもあった。

ナライの語源は、山に並んで（沿って）吹く風を意味している。そのために、土地によってナライが吹く方向が相違する。銚子や房総などでは、北東風がナライの風である。気仙沼地方では、唐桑半島や気仙沼の西部丘陵が、北北西から南南東へ向けて山並みが続いていることから、気仙沼湾では北西風をナライと呼んだ。しかも、湾自体が太平洋に向かって南東に開いているために、北西のナライの風は、帆船時代には港から出る船のダシノカゼだった。港に入った船はこの風を待ち、この風をつかむむようにして帆を上げて出港し、まずは湾口まで目ざした。

この港町にナライという言葉が地名として残った第一の理由である。

近世から埋め立ててきて、三日町・八日町が、岩手県の室根山から下ろす「室根おろし」などのナライ風の通り道になり、ダシノカゼを内湾に集める機能をもたせたのである。自然の条件を考慮した、見事な港湾計画であったと思われる。どこの港でもそうであるが、港は「風除け」と「風待ち」の二つの機能をもっている。気仙沼港の場合は、北風と西風を除ける丘陵が聳え、その間の北西から吹く風が「風待ち」の風となった。



【写真1 寛政年間の内湾付近の絵図】

2. 近世の気仙沼港

気仙沼港が「内湾」の築港と共に発展する機縁となったのは、延宝3年（1675）に紀州のカツオ一本釣りの漁師たちが多数、唐桑の鮪立の古館（鈴木）家に逗留をして、その技術をこの地方に広め、定着させたことも大きい。

天明6年（1786）に気仙沼を訪れた菅江真澄（1754～1829）は、その7月20日の日記の中で、「かつうををつる船、いくらともなく沖をさしてこぎ行」と記している。

同じころの天明8年（1788）に気仙沼を訪れた、仙台藩の地理学者の古川古松軒（1726～1807）は、その『東遊雑記』（1788）の中で、次のように記した。

気仙沼という所も入海にして、三百余軒の町にて大概の所なり。（中略）鹿折村には塩を製し、気仙沼は商家多く、大海より三里の入海にて、五百石積みくらの船数かず入津してあり。鯉魚の名所にて、数多取れることゆえに値賤し。大いなる鯉一本を、五十文くらいに売買せることなり。

紀州から伝わったカツオ一本釣りの漁法によって、飛躍的にカツオの水揚げを上げてゆくわけだが、同時に気仙沼湾内でエサイワシを捕る二隻曳きのイワシ舟曳き網も、鹿折の四ヶ浜を中心に盛んになってくる。このイワシ網は、近世からその漁期が「夏網」と「冬網」とに分かれていた。

夏網ではカツオのエサとして捕るが、冬網で捕ったイワシは、主にメ粕として加工され、カツオ節とともに、気仙沼の町を中心に廻船問屋を成立させていく重要な商品となった。三陸沿岸の漁業の発達には、西日本や関東からの直接的な漁業技術の流入だけでなく、関東や関西などで作られた綿・菜種・藍などの魚肥として利用され、メ粕が大量に買い求められ続けたことも背景にある。

また、安永期（1772～81）からは、気仙沼の商人たちは、江戸や銚子へ直接に海産物を移出するだけでなく、近在の商人から関東への運送を依頼される場合も生じてきた。たとえば、砂子浜という漁村（岩手県大船渡市三陸町綾里）の千田家では、近辺の海産物を手広く集め、それを気仙沼まで「手船」（自己所有の船）で運び、気仙沼からは関東方面へ「親船」（弁財船）が運んでいた。

3. 廻船から大型漁船へー明治・大正時代の気仙沼港ー

明治 38 年（1905）に、魚町の加藤家では、千葉県白浜から様式帆船の幸徳丸を購入した。おそらく、気仙沼の廻船で、最後の時代を象徴する帆船であろう。購入の翌年の「送券」には、銚子から 2,048 俵のサツマイモを運送していることが記されている。気仙沼からは木材を運んだと伝えられている。



【写真 2 気仙沼地方の最後の廻船・幸徳丸】

明治 39 年（1906）に、焼玉石油発動機船の早池峰丸が、気仙沼で初めての動力船として湾内に登場した。明治 44 年（1911）には、気仙沼漁協が鼎丸という動力漁船を湾内に浮かばせた。帆走も兼ねたため、帆柱も付けていた。

陸上交通の発達に伴い、廻船が次々に帆を下ろしていく中で、漁船の方は次々と動力化して沖へ沖へと進出していった。近海で活躍する船は、廻船から漁船へとその主役を譲り

渡したのである。

また、明治 41 年（1908）には、三陸汽船が創立された。その船は塩竈～宮古間を航行したが、三陸沿岸の物資と乗客の運送に貢献した。一時代前の子どもたちが、オモチャや漫画の本を大人にねだったときに、「蒸気来っから」と言って慰められたのは、この三陸汽船のことである。



【写真 3 出港する三陸汽船】（舢舨（はしけ）が乗客を乗せていく）

近世の菅江真澄が夏の気仙沼を訪れてカツオに注目したように、近代の柳田国男も大正 9 年（1920）の 8 月に気仙沼を訪れ、その日記にカツオのことを次のように記している。

此辺一帯に今鯉漁の盛り。気仙沼の町では方々に鯉節を製造して居る。又鯉釣りの釣針を作って賣る店もあった。材料はトナカイ（馴鹿）の角だといふ。（中略）岸に繋いだ鯉船を、法印さんが歴訪して祈祷をして居る。御布施に生の鯉を貰って行く様子が、見馴れないから面白い。房州から人を尋ねて来て居るといふ者に逢ふ。身内の者が鯉の漁船に働いて居るのに、用が出来たからやって来たが、もう十日にもなるがまだ行逢へぬと謂って居る。

また、柳田国男は、気仙沼地方のある光景を『雪国の春』の中に次のように活写している。

旧盆の季節が近くなったので、これらの在所（大島・唐桑）から石油発動機の渡船に乗って、娘や女房たちが何人となき、毎日五升、一斗の小麦の袋を背負い、気仙沼付近の水車小屋へ、団子用の粉をひきに泊まりがけに渡ってくる。

柳田は、大島や唐桑で手杵や石臼を用いているにもかかわらず、水車小屋へ出向く人びとをとおして、文明を何でも試みようとする姿を見出している。大正時代は技術革新の時代であったからである。

明治末の漁船の動力化は、宮城県の漁獲高を大きく躍進させた。大正元年（1912）に日本全国で27～28位であった宮城県は、同11年（1922）には第8位まで上昇する。大正10年代は、日本の近海漁業の意気盛んな時代であった。大正11年に気仙沼の映画館で製作された活動写真「気仙沼港・実況」には「外洋ハ直チニ世界有数ノ漁場タル金華山沖漁場ヲ控エ一々年ノ生産額優ニ一千蔓円ニ及ブ。又出入ノ船舶絶エルコトナク海産商工業ノ旺盛ナル我ガ東海岸稀有ノ地ト云ハル」とある。

大正元年に火力発電による操業を始めた気仙沼では、電力は、昼は機械化された水産加工業を中心に、夜は灯火用として消費された。水産加工業は、夏はカツオ節、冬はサメによる竹輪・かまぼこの生産に終始した。大正11年の本吉郡物産共進会には、そのカツオ節や竹輪が出品されている。日本で初めての魚類専門の冷蔵庫ができたのが、柳田が来訪した大正9年の年。これにより、焼竹輪の冷凍保存に成功し、夏の出荷も可能になった。柳田は気仙沼でカツオ船に働いている房州の者のことにも触れているが、茨城県の漁船が明治38年（1905）、三重県尾鷲市のカツオ船が初めて入港したのが大正5～6年のころで、気仙沼へ外来船が来始めていた。

4. 昭和初期の気仙沼港

ナライ風をダシノカゼとして内湾に集めることで港を造ったことは先に述べたが、歴史はいつも思わぬ事態を招き、意地の悪い贈り物を返してよこした。この同じナライ風は、大正4年（1915）と昭和4年（1929）の二度にわたって、気仙沼港に面した町の中心部を焼き尽くした。昭和4年の大火には、この風は炎を運んで海を越え、対岸の大浦まで被害を拡大させた。夜の海に光を映しながら越えていく炎の群れを、人々はどのような恐怖感を抱いて見ていただろうか。この大火は、海運で栄えたこの港の、一つの機能を終焉させた送り火だった。同じ年の7月には気仙沼駅が開業し、日本国中の交通体系が海上中心から陸上中心へと完成させようとしていた時期であったからである。「陸の孤島」という名を付されていくのも、このころからである。この大火の後の昭和6年（1931）に、女川から三陸汽船に乗って気仙沼港に午後7時半に着いた高村光太郎は、第一印象を次のように述べている。

船から見た気仙沼町の花やかな燈火に驚き、上陸して更にその遺憾なく近代的なお為着せを着てゐる街の東京ぶりに驚く。

光太郎が来た年の気仙沼は、昭和4年の大火の後の、復興の槌音が響いていたころである。三陸汽船が廃業するのはこの2年後であるから、光太郎は気仙沼の交通体系が船から汽車へと変わろうとする寸前に、旅行者として立ち寄ったことになる。鉄道は「文化の母」あるいは「産業の父」と呼ばれ、鮮魚も鉄道輸送に回され、気仙沼駅前に運送店も開業された。

大正4年の大火のときもそうであったが、気仙沼の町と港は、大火後に当時の文明を全面的に受け入れることで復興する。東京直輸入の文化が導入されたわけであって、光太郎が見聞したのも、新時代の息吹そのものであった。婦人会の隣保事業、公衆用水道栓、日本百景当選の記念碑、道路の街灯、新築の警察署、広大な小学校でのテニス競技、学術講

演会、塩田の歴史を記した立て札、浪花節にシネマ、銀座裏まがいのカフェ、「社会施設の神経がひどく目につく」とともに、「おそろしく至れり尽せりの外客設備」に旅人は茫然としてしまうと、記されている。

沖合漁業ではサンマの大漁が続き、港はサンマを塩蔵樽に詰め込む人たちで賑わった。気仙沼地方では豊漁のときに「今日は猫またぎだ」と呼んだ。海岸に上がった魚を猫までが食べあきて、魚をまたいで歩いていたからである。昭和 10 年（1935）には魚市場が開業し、翌 11 年には気仙沼港で初めての南方マグロ延縄漁船、精良丸の進水式があった。ミッドウェー海域のマグロ漁が中心で、本格的な遠洋漁業が始まろうとしていた。

5. 戦後の気仙沼港

気仙沼港は、昭和 26 年（1951）、第三種漁港の指定を受け、前述したように魚市場が昭和 31 年（1956）に移転している。建物は幅 27.5m、長さ 320m で、当時は東洋一の規模と喧伝された。このころから、カツオー本釣りやマグロ延縄漁のほかに、サンマの水揚げが目立ってきた。サンマは、昭和 33 年（1958）から 44 年（1969）まで 12 年間、全国一の漁獲量を誇ったが、特に昭和 34 年（1959）のサンマの漁獲量は 56,384 トンで、気仙沼港では歴代最高の数字を記録している。サンマを山と積んだトラックが土けむりを上げながら行き交い、カーブの付近ではサンマを道路にボタボタと落としていった。子どもたちは面白がって拾いに行き、それはそのまま夕食の食卓にのぼった。サンマは、気仙沼港の昭和 30 年代を象徴する魚となった。

また、昭和 30 年代には、北洋サケマス漁の独航船が気仙沼港から出航していった時代でもある。昭和 43 年（1968）には北洋サケマス漁の水揚げ指定港となっている。

昭和 50 年（1975）には、産地市場としては全国初の排水処理施設が完成。湾内の汚染防止のため、魚を洗浄した血水などの浄化を始めた。昭和 52 年（1977）の 200 カイリ・領海 12 カイリの後も、水揚げ高 300 億円を越える港町として、現在も記録を更新している。

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 信仰

①安波大杉神社

近世の流行神の一つである「アンバ様」と呼ばれる信仰と習俗は、南は千葉県から北は岩手県まで見受けられる。その発祥地は、茨城県稲敷郡桜川村阿波にある大杉神社であり、「阿波分社六百」ともいわれている。ただし、「安波山」という山名として定着しているのは気仙沼だけである。

仙台藩には先に石巻港に上陸して南下し始めるが、元文4年(1739)に藩によるアンバ信仰に対する禁制の最中に、気仙沼の廻船問屋の商人3名が伊勢参宮の下向の折、「阿波大杉神社」を勧請してきて、山腹に祀った。気仙沼市の五十鈴神社所蔵の「大杉神社御由緒書」(1869)には、「勧頂(請)元文四年正月廿六日、当村字西風釜卯左エ門、横町長左エ門、八日町市右エ門、右三名ニテ伊勢参宮下向ノ砌、海上安全ノタメ、常陸国大杉神社ヨリ遷シ奉尊敬ルト云フ」とある。

おそらく、仙台藩を騒がせたアンバ様とは別ルートで招来したものであろうが、江戸の流行神の本質だけはつかみとってきたらしく、昭和の世までの安波山の「野がけ」はそれを伝えている。旧暦3月27日の祭礼には、安波山から支脈の陣山へかけて、各家で弁当や酒を持ち寄って登り、春の日長を楽しんだ。その日は役所も銀行も学校も半ドンで安波山に登り、街はもぬけの殻となった。アンバ信仰の流行につれて、関東のアンバ様の神輿の囃し言葉の一つに、「アンバ大杉大明神 食ツタリ飲ンダリヨイヤサ」とあるが、これと同様の港町の開放的な一日であった。この祭りは昭和40年代まで盛んであった。



【写真4 安波山頂上での野駆け】

②立ちエビス

エビス様の神像は、小わきにタイを抱えた座像が多いが、気仙沼港に面した五十鈴神社の浮見堂に立つエビス様は「立ちエビス」である。座っているエビス様の姿が魚を待つ姿とすれば、立っている姿はより積極的に漁を求めに行く姿である。沖へ沖へと漁を求めて

きた気仙沼の漁業の歴史にもふさわしい姿である。



【写真5 五十鈴神社の「立ちエビス」(東日本大震災で流出した。)

③船絵馬

気仙沼地方の船絵馬は、幕末から昭和の時代にかけて奉納されたものが多いようである。船主や船頭が郷里の寺社に奉納した中小の船絵馬が多い。観音寺に嘉永7年(1854)に奉納された船絵馬は、トリカジ(左舷)からトモにかけて立体的に表現された弁財船である。帆が描かれてなく、また、志野、はる、よしのという3人の女性と船大工卯三郎が奉納した特異な絵馬である。一般的には、船に女性を乗せることなどはタブーだった時代だが、逆に女性が船に大きな関わりを持つ場合があった。たとえば、船下ろしのときには、オモテ(船首)綱に当たるオスミノツナを切ってから船を下ろすが、この綱を切る役をする者が気仙沼地方では棟梁の奥さんであることが多かった。造船儀礼と女性とは関わりが深かったのであり、そのことを思い起させる船絵馬である。



【写真6 廻船絵馬と奉納者名・気仙沼市の観音寺蔵】

④盆舟

8月16日の朝に、盆舟を港から流す習俗が昭和30年代まであった。盆舟はコモで作られ、昆布でしぼる。カワヤナギを帆柱に見立て、五色のカキダレで舟を飾り、盆中に上げた供

物の五色マンジュウ・ハシバミ・ミョウガ・ブドウ・キュウリ・ナスなどを蓮の葉またはイモノコ（里芋）の葉に包み、それを盆舟に積んで、海に流した。



【写真 7 港の河岸に置かれた盆船】

（2）節句・行事

①ミノチン

気仙沼港に面した町では、正月 2 日の早朝から、親船（廻船）のある家に子供等が押しかけ「みのちん」として一銭二銭の小銭を貰う行事がある。「みのちん」とは「身の賃」のことで、船乗りの給金のことといわれる。つまり、正月 2 日に「親船」（廻船問屋）に、子どもたちが「身の賃」をもらいに行くことは、その一年間は乗組員が絶えないくらいに、その問屋が繁盛することをお祝いしているわけであった。その「身の賃」という呼び方は、廻船でもカツオ船のように漁船でも同様であった。

②ナマコドリ

正月 14 日の夕方、釜ノ前（現在の魚町）の男の子たちが、萱で作った矢壺に海鼠を包み、縄をつけて大勢で曳き、鐘や太鼓をたたいて「ナマコドリの御通りもぐらもち内に銭と金舞ひ込んだ（あるいは銭と金儲かれ）」と囃しながら、各戸の土蔵や倉を 3 度めぐり歩く、「ナマコドリ」と呼ばれる行事がある。本来は田畑を荒らすモグラを退治するために、小正月に農家などで願っておく行事であるが、廻船問屋などの商家を中心とした港町のために、その意味が変化して伝えられている。

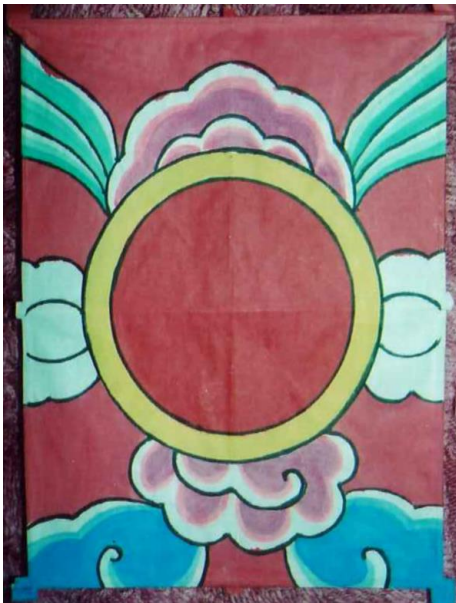


【写真 8 ナマコドリ】

③「日の出風」

気仙沼地方では、小正月のころに魚町の魚問屋など中心に屋号を染め抜いた「大テンバタ」をあげた。横丁山や御庵山から「安波おろし」の風に乗って、海に向かってあげたという。古老の話では明治からの「大テンバタあげ」は、正月の厄払いの行事であり、厄年の者が風を作ってあげたという。風の方言のテンバタは、「天狗旗」のことである。

この地方では、旧暦の3月節句にも「風合戦」を行なった。町内商店の番頭や丁稚に主人も加わって「屋号風」（家印を描いた風）をあげ、海に落ちた方を負けにするという勇壮な競技であった。屋号風は2メートルくらいの大風もあり、太い縄を付けてシッポにした。藤で作られた「うなり」を付けた風もあり、ブンブンと音がすると町を通る人は空を見上げたものだという。風の音は魚町界わいの繁栄の音でもあった。その中でも、熊谷慶治が作った「日の出風」は気仙沼を代表する風で、日の出の赤色は食紅を用いたという。今では三陸沿岸を代表する風であるばかりでなく、全国の風あげファンをあこがれる風になった。気仙沼地方にはもうひとつ、子供用のカラゲイテンバタという子供用の風があった。カラゲイ（魚のエイ）の形態に似た小風であった。



【写真9 日の出風(左)とカラゲイテンバタ(右)】

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

(1) 物資の流通を担う産業

①魚問屋と「問屋仕込制度」

気仙沼地方では、廻船問屋などに対して「船をかける」という言い方がされる。それは船主のことであり「船元」とも呼ばれるが、気仙沼港の近郊の漁村では「船主船頭」と呼んで、船主が実際に漁をしていたことがあった。やがて、「問屋仕込制度」を前提とした「魚問屋」が成立してくる。「問屋仕込制度」とは、漁業生産に必要な資金資材（船）の一部、または大部分を魚問屋が生産者に前貸しをして、その代わりに漁獲物はすべて前貸をした問屋が安く買い取る制度のことである。この魚問屋が気仙沼地方以外の外来船に対しては「船宿」として接触していくことになった。

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

(1) 港湾利用産業

①水産加工業

廻船問屋では、家の目の前に、船着場であるダシ（栈橋）が海に突き出ており、明治時代には、その上に 120 間以内の小さな「化製場」などが建っていた。化製場の中には、压榨機・汚水留・蒸煎釜・乾燥場・木置場（燃料用）などが見られ、カツオ節などを、水揚げ後にすぐに加工していた。他に「乾魚製造場」なども見られ、干し魚・干しスルメ・粕粕なども、海のそばで加工していた。

主に夏はカツオ節、冬は竹輪を製造したが、竹輪が考案されたのは明治 15 年（1882）のことである。それまで見向きもされなかったアブラザメ・ヨシキリザメをサメ底刺網で捕り、「竹輪蒲鉾」と名づけて東京方面に郵送販売をした。「竹輪」が自立的な産業として確立した点において、気仙沼港が果たした役割は大きい。

その竹輪製造業に付随する事業として出発したのが、鮫油・魚肥・鮫卵カステラ（カステラ蒲鉾）、そしてサメヒレであった。フカヒレ（サメヒレ）は、最近のグルメブームで気仙沼が一躍有名になってしまったが、もともと家庭料理や伝統食にはなかった。サメをフカと呼ぶのは西日本であって、近世に「長崎俵物」を中国へ輸出していたときは、当地方からはナマコやアワビだけであって、フカヒレはなかった。

気仙沼湾の海苔養殖は、廻船業を営んでいた横田屋が船の遭難などで失敗した後、安政元年（1853）に大森（現在の東京都太田区）から技術導入をはかり、海苔製造熟練者 6 名は横田家の分家やその婿養子になって気仙沼に定着した。当時は、他国へ技術を伝授すると刑罰に処せられたため、他所の土地の者を受け入れる港町の風土があったればこそ、導入できた技術である。気仙沼湾に大川が流入する内ノ脇で成功したが、そこに新しい市場が開設されるために埋め立てられ、昭和 34 年（1959）には退くことになった。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 遊里＝料亭文化

松川二郎の『全国花街めぐり』（1929）によると、気仙沼には「四十余軒の大小料亭」があり、芸妓屋も 3 軒あったと記されている。カツオ船などの漁期初めのお祝い（乗っ立ちのオヒマチ）や漁の切り上げの祝いなどは、以前は船主や船頭の家で行われたが、次第に料亭で行われるようになった。現在の「扇屋」や「自由亭」には、その面影を残している。

特に、港からすぐの坂道に並んでいた「太田」の歓楽街は、外来船の船員たちが、「どんなに疲れていても、あの坂をのぼっていった」と言われるくらい繁華なところであった。もともとは太田の沢の水がおいしく、その水を求めに船員たちが立ち寄ったところであったが、その水を用いた茶屋ができ、後に歓楽街になるまで発展した。

(2) 芸術・文芸

①来遊文人

近世には菅江真澄（1754～1829）が天明 6 年（1786）に気仙沼を来訪、7 月 8 日から 8

月 4 日まで約一カ月滞在して、「はしわのわかば続」などの日記に当時の盆中の様子を遺した。天明 8 年（1788）9 月 17 日には、古川古松軒（1726～1807）が来訪、『東遊雑記』に記している。近代には、柳田国男（1875～1962）が大正 9 年（1920）に来訪、『雪国の春』などにそのときの随想がある。柳田は大正 4 年（1915）と昭和 4 年（1929）に見舞われた気仙沼町の二つの大火と、明治 29 年（1896）と昭和 8 年（1933）という二つの三陸大津波の間に来ている。高村光太郎（1883～1956）は昭和 6 年（1931）の来訪、後に「三陸廻り」を記すことになった。それぞれ、真澄 32 歳・古松軒 62 歳・柳田 45 歳・光太郎 48 歳の時期である。彼らの記した文の内容に関しては、第 1 章にその一部を紹介している。

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）港町の景色（みなとの文化的景観）

天保 14 年（1843）に、油井牧山が「鼎浦八勝」という漢詩を作ってから、内湾から背景の気仙沼湾を望んだ風景を「鼎ヶ浦」と呼ぶようになった。内湾の入口に面する神明崎と柏崎、それから内湾の対岸にある蜂ヶ崎を、中国の器である「鼎」の三つの脚に見立てたことによる。後にこの「鼎浦」は、気仙沼の小学校や女子高校に冠せられ、あるいは大正デモクラシーの運動家、小山鼎浦のペン・ネームともなった。おそらく、陣山か安波山から内湾を望んだ風景を指したものと思われ、その後の絵はがきなどを通して、気仙沼港を代表させる典型的な風景として確立されていった。また、神明崎・柏崎・蜂ヶ崎という 3 つの岬を結ぶ海域は、かつては船幽霊などが出没したと伝えられるミステリー・ゾーンの世界である。現実的な内湾と、異界とも他界ともいえる背景の気仙沼湾を同時に眺めることができることが、審美的な風景として、旅人をはじめとして魅了したものと思われる。



【写真 10 安波山から見た内湾と気仙沼湾の風景①】

（「蓑虫山人絵日記」（明治 24 年＝1891 年））



【写真 10 安波山から見た内湾と気仙沼湾の風景②】
(明治時代の絵葉書)

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

1. 「風待ち研究会」

昭和4年(1929)の大火の後、気仙沼の町は、岩手県陸前高田地方からの大工集団である「気仙大工」によって再建したといってもよい。気仙沼では宮大工も兼ねており、瀟洒な建物が今でも残っている。気仙大工が建てた旅館は、当時の広告に「改良旅館」とある。この町並みを残そうと平成14年(2002)に発足したのが、「風待ち研究会」である。

これらの建物のうち、魚問屋の建物には大きな家印が付けられ、それぞれの問屋に関わりのある船舶は、この家印を目当てに入港した。漁村では、姓と屋号と家印とは別であるが、漁港では、この家印の呼称が屋号としても呼ばれている。そのために、最近では「屋号通り」と呼んで、この界限を「風待ち研究会」とともに観光資源とする動きが見られる。

〔付記〕

「風待ち研究会」の尽力で内湾周辺の建物が国指定の登録文化財になったが、指定された建物7軒のすべてが東日本大震災で流失もしくは破壊された。